

第3節 荒海貝塚の人びと

1 荒海付近の環境変化

荒海貝塚がのる台地下の低地（標高約2m）は、縄文時代には海水が侵入し、現在の台地は浅い海に浮かぶ島であった。荒海貝塚の南西約1kmに位置する荒海川と根木名川の合流地点近くの荒海川川底の泥層からこの地域で初めて海棲の貝類の自然堆積が確認された。これにより根木名川の沖積低地は海成沖積層であることが判明した。松島義章が1989年におこなった調査結果によると、その種類は、表1に示すとおりで、サルボウ、カモノアシガキ、ウメノハナガイ、アサリ、マキミゾズメモツボ、シマハマツボ？、コメツブガイが多いか一般的であり、ウニ類も含んでいる。

カモノアシガキが南関東地方に侵入してきたのは、約6,500年前であり、約4,200年前まで生息していたことが明らかになっているので、根木名川の沖積低地にこれらの貝類が生息していた年代は、約6,500～5,000年前と予想された。この時期には成田の市街地近くまで海水が侵入して、泥深い複雑な海岸線をもつ溺れ谷が形成されていたと推定された。

その後、この貝層から採集したサルボウの炭素年代を日本アイソトープ協会で測定したところ、 $4,150 \pm 100$ yBP という値が得られた（半減期5,730年で計算）。ただし、海の貝のばあいは海洋リザーバー効果を考慮する必要があるから、実際より古く出ている可能性を考えるべきであろう。

その一方、西村A地点D・E・Fトレンチでは、貝塚の下層は鹹水性のハマグリ・サルボウで、上層になると汽水性のヤマトシジミに変化していた〔西村1984〕。海水面の低下により付近まではいりこんでいた海水は後退し、かわって淡水化が進んでいたことをうかがわせる。貝塚でみるかぎり、変化した時期はサルボウとハマグリを主体とする縄文後期中頃からほとんどヤマトシジミに変わった晩期末の間であるから、おそらく3,500年前頃なのであろう。これに対応する形で、魚骨もマダイ、クロダイ、スズキの量が少なくなり、かわってコイが少しではあるが現れる。こうして、漁撈活動に重きをおいていた荒海の人々の生活基盤は失われていく。

荒海貝塚では、荒海4式の時期を最後に人跡はほぼ途絶える。それにつづくのは弥生中期初めであるが、荒海貝塚付近ではその時期の遺物のごくわずかが知られているにすぎない。環境の変化が人びとの伝統的な生活の転変を余儀なくさせたのであろう。

2 稲作の問題

私たちの発掘調査以前に、稲粃の圧痕（長さ5.8mm）が見ついた土器片（図245）が荒海貝塚から出土していることを佐藤敏也が紹介していた〔佐藤1971：図18〕。しかし、西村正衛の報告にはその記述はなく、佐藤もまた土器の出土状態について記していない。土器は底部の小さな破片で、底面に木の葉圧痕、外面に貝殻条痕がついているから、荒海2式以降であって、設楽の同定では荒海4式である。その後、中沢道彦と丑野毅はレプリカ法によって再検討しその結果を報告している〔中沢・丑野1998：22-24〕。彼らによると、A-Aトレンチ5区混土貝層から出土したもので、「弥生時代前期末の水Ⅱに併行する段階」と考えている。精査の結果では、粃状の圧痕は長さ6.0mm以上、幅3.9mm以上で粃としては大きいほうである。しかし、木葉痕の上から付いているために、「粃であるかも

しれないが木葉をはさんで付けられた圧痕であったため、断定するに至っていない」という。

今回の発掘調査では、イネの花粉およびプラントオパールの発見にあたったところ、千網式および荒海1式土器を含む西壁の貝層からイネの藁と籾殻のプラントオパールを大量に検出した(図246)。プラントオパールの検査は、それらより以下の土層すなわち前浦式以前についても実施したけれども、まったく見いだすことはできなかった。

イネのプラントオパールは、同じ時期に属する成田市宝田鳥羽貝塚の露出している貝層中の土層からも検出することができた。ただし、第2次調査に関連して再度検査したさいにはイネのプラントオパールは検出されなかった。同貝塚は、荒海貝塚がのる台地の西南の対岸、標高4~6mの微高地上に立地している〔奈和同人会1987, 青木2000〕。

これらのことは、当地の縄文晩期末にイネの藁と籾殻が稲作をおこなっている他所から持ち込まれたとするよりも、荒海貝塚付近で稲作をおこなっていたと解釈するほうが自然であろう。荒海貝塚は旧長沼の低地部、現水田面から比高30mの台地上に立地するので、水田をつくることは貝塚の近辺では不可能であって、台地の下までおりなければならない。しかし、低地で稲作をおこなうには耕作具が必要であるが、荒海貝塚の出土遺物のなかからその候補をあげることはできない。1997年に千葉県史編さん事業の一環として千葉県史料研究財団が調査した荒海川表遺跡は、荒海3式を中心とする時期の遺跡であるが、ここから発掘された石器〔石橋編2001:89-102〕のなかにも耕作・収穫にかかわる遺物は1点も含まれていない。遺跡は、荒海貝塚のある台地の下の低地に面する段丘上に立地し、水田稲作をおこなっていたとすれば、真っ先に候補地となるところである。その一方、台地上で陸稲として栽培するのであれば、まだ可能であろう。収穫具としては、両側の刃がほぼ平行する両刃の磨製石器の小破片がその候補になるていどであるが、この石器についても最近では砥石とする説が提出されており〔大工原2004:407-408〕、不用意には使えない。

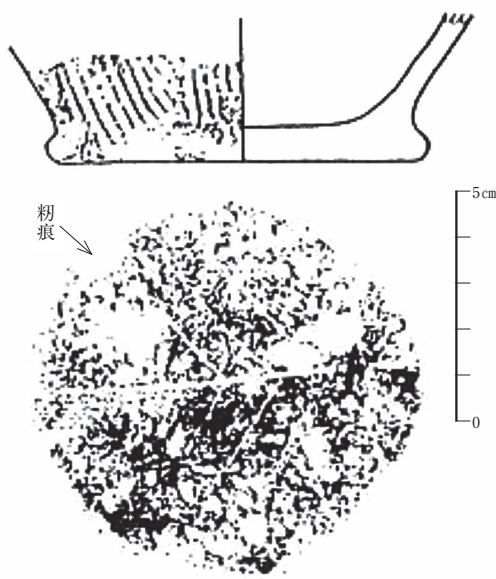


図245 荒海貝塚出土の籾痕土器〔佐藤1971〕

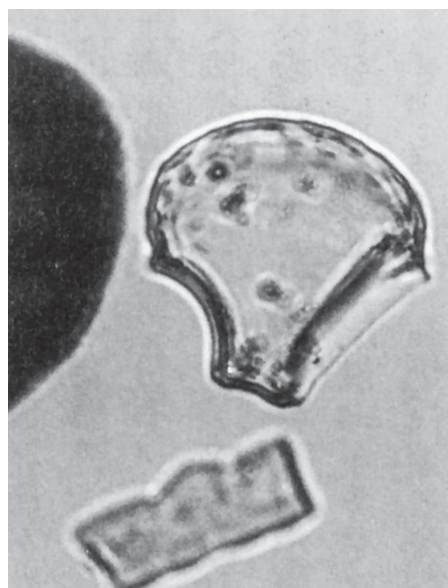


図246 荒海貝塚の縄文晩期の層から検出したイネのプラント・オパール

表 80 西日本弥生／東日本縄文の併行関係（本報告書での設案の年代観）

畿内	東海西部	中部高地	関東（荒海貝塚）	東北
口酒井式	馬見塚F式	佐野Ⅱb式	安行3d式・前浦Ⅱ式	大洞C2式（新）
船橋式	五貫森式	女鳥羽川式	千網1式	大洞A1式
長原式	馬見塚式（下り松）	離山式	千網2式～千網4式	大洞A2式
畿内第Ⅰ様式（古段階）・長原式	馬見塚式（馬見塚D）	氷Ⅰ式古段階	千網5式（18Ⅰ区）	大洞A2式
畿内第Ⅰ様式（中段階）・水走式	遠賀川式（中段階）・樫王式	氷Ⅰ式中段階	荒海1式	大洞A'式（古）
畿内第Ⅰ様式（中段階）	遠賀川式（中段階）・樫王式	氷Ⅰ式新段階	荒海1式（Ⅰ-2・Ⅰ-3区、Ⅱ-1区）～荒海2式	大洞A'式（新）
畿内第Ⅰ様式（新段階）	遠賀川式（新段階）・水神平式	氷Ⅱ式	荒海3式～4式	青木畑式・砂沢式
畿内第Ⅱ様式	朝日式・続水神平式	庄ノ畑式	殿内2式	山王Ⅲ層式・二枚橋式

また、荒海貝塚からは確実な例は見つかっていないが、縄文晩期～弥生中期の遺跡から出土する「横刃形石器」については、イネの穂摘具の可能性を筆者は追究してきた。しかし、愛知県田原市（旧、渥美町）伊川津貝塚出土品については顕著な磨耗痕を認められたけれども、御堂島正の顕微鏡観察ではイネ科植物の穂を摘んだ可能性は否定された（春成への個人的教示）。その後、群馬県安中市中野谷原遺跡出土の刃部に光沢をもつ横刃形石器の顕微鏡観察をおこなった高瀬克範は、イネ科植物を切断したさいに特徴的な磨耗痕を見いだしている〔高瀬2004〕。その一方、静岡市（旧、清水市）天王山遺跡出土の「大形刃器」の使用痕を分析した町田勝則は、「横刃形石器」をイネ科植物の切断に使った可能性を否定し、肉の切断や皮の掻きとりなどに使った石器と推定している〔町田2008：400〕。石器からこの時期の農耕を証明する見通しはまだたっていないとはいえない状態である。

イネのプラントオパール（PO）の検出例は、岡山県真庭市美甘村姫笹原遺跡で縄文中期、さらに岡山市北区朝寝鼻貝塚では縄文前期初めまでさかのぼって認められたという〔小林博昭1999、高橋1992、1994、2001〕。今回の発掘調査当時は、プラントオパール分析により千網式・荒海1式土器の時期に荒海貝塚付近で稲作をおこなっていた可能性を指摘した。ところが、その後、プラントオパール法の信頼性が著しく減じており、現在ではこの結果をそのまま受け止めることはできなくなっている〔濱田2019：141-142〕。荒海貝塚の貝層中から水洗選別法で検出された炭化米と未炭化オオムギは、¹⁴C年代の測定結果、近世～現代に混入したものと推定されるにいたった。その一方、イネの靱痕がついた縄文土器の上限は、縄文後期末の福田K3式までさかのぼるとの発表があった〔高橋1997〕。しかし、その後、土器型式の認定に疑問が提出され、現在では縄文晩期後半の突帯文土器の時期に落ちている〔濱田2019、設案ほか2019：250〕。考古学的遺物の共伴は皆無または不十分であるが、打製石鋏、先端をスプーン状に加工した木製掘り棒、打製穂摘み具が、その候補となる。現状では、荒海貝塚における稲作の存在は否定的にならざるをえなくなった。近年、種子圧痕のレプリカ法による調査が積極的におこなわれ、その結果、中部地方では縄文晩期後半にアワ・ヒエの雑穀類の栽培がおこなわれていることが判明している〔設案2020〕。この方法で荒海貝塚出土土器を全点調査したけれども、その痕跡を見出すことはできなかった。関東地方南部に位置する荒海貝塚では、雑穀類を栽培していた証拠も得られなかったわけである。

関東地方では、神奈川県大井町中屋敷遺跡の9号土坑（楕円形、径140×110cm、深さ65cm）から炭化したイネ、アワの種実が多量、キビの種実が少量出土し、この地方に稲作農耕が存在した最古の証拠とされている〔昭和女子大学発掘調査団2008：145-147・179-181〕。時期は「浮線文直後」の「中屋敷式」すなわち「弥生前期後葉」で、炭素年代の較正年代は前5世紀後半から前4世紀前半であるから、弥生前期新段階と併行する。しかし、中屋敷遺跡の立地は浅い谷に面する台地上であり、伴出の石器には稲作と直接結びつきそうなものは見つかっていない。長野県飯田市石行遺跡では五貫森式の土器にイネ朶の圧痕が認められている〔中沢・丑野1998〕。山梨県韮崎市宮ノ前遺跡では氷Ⅰ式の時期の水田跡が見つかったという報告がある〔平野ほか編1992〕。しかし、遺跡・遺物のあり方からは容易に認めがたいという意見もだされている。

関東地方で現在知られている最古の水田は、神奈川県小田原市中里遺跡で見つかった弥生中期中頃、前3世紀頃の例である〔戸田編2015〕。前6～5世紀ころの荒海貝塚とは約300年の開きがある。

現在明らかになっている千葉県の水田遺構は、水田に伴う可能性がよい堰遺構に広鋤・狭鋤・又鋤・鋤などの木製農耕具と田下駄・臼・杵が伴った君津市常代遺跡が、弥生中期中頃である〔伊藤ほか1996、小高1998〕。碁盤目状の小区画水田170面以上が検出された市原市菊間市原条里制遺跡並木地区の時期は、弥生中期後半、宮ノ台式とされている〔小久貫ほか1999〕。それは弥生集落を特徴づける環壕、方形周溝墓の出現時期と重なる。佐倉市大崎台遺跡、市原市菊間遺跡などは、この時期、前2世紀後半のことである。

なお、荒海貝塚の発掘中に水洗法によって貝層中から検出した炭化コメ粒は、炭素年代の測定をおこなったところ、近世以降の混入であった。このことは、年代測定をおこなっていない水洗法による資料は、それだけでは使えないという教訓をのこした。

炭素14年代を測定し国際較正曲線にもとづいて較正年代をだすことにより、縄文・弥生のこれまでの年代観は、21世紀にいたって一変した。東日本各地で縄文／弥生の年代が測定され、東日本に稲作が段階的に波及していく様子はかなり明らかになってきた。その結果、東北地方前400年頃、中部地方前400年頃で、西関東地方は前300～前200年頃となっている〔小林2009〕。南関東地方の荒海貝塚付近では、荒海Ⅰ式の時期に稲作をおこなっていた確証は得られておらず、荒海Ⅳ式土器に付着していた朶痕を認めるならば、中部地方よりも遅れて、畿内第Ⅰ様式の新段階になってようやく、稲作が部分的にも始まったことになろう。

3 荒海貝塚の人びとの生業

今回の調査ではA区の貝層で、ヤマトシジミを採集し食後に廃棄した単位を確認する一方、ヤマトシジミの殻の成長線を調べた結果、厚さ約70cmの貝層は、大きく3単位の層に分かれ、3年分に相当することが判明した。1年間の堆積層の厚さは約30cmで、シカなどの獣骨が散布しているのは、その年のヤマトシジミの採集が終わった面であって、獣骨の散布面は1年周期に存在することを確認した。すなわち、シカなどの獣類の捕獲にはつよい季節性がうかがわれる。

さらに、プラントオパール分析により千網式・荒海Ⅰ式土器の時期に荒海貝塚付近で稲作をおこなっていた可能性が指摘された。また、私たちの発掘以前にイネの朶痕のついた荒海Ⅱ式以降の土器片が出土していた（図245）。しかし、それを考古学的に裏付ける遺構・遺物などの証拠を見つけ

ることはできなかった。たとえば打製石器の土掘具は、縄文時代には短冊形や分銅形の小型品（刃幅が5cm前後）が多いのにたいして、弥生時代になると撥形で大型品（刃幅が9cmを中心に5~14cm）が多くなる傾向にある〔森岡・設楽・中藪 2005：130-132〕。また、中部・関東地方では稲作を始めた弥生時代になると、横長剥片ないし貝殻状剥片の底辺に細かな剥離を加えたり、そのまま利用する横刃形石器と呼ぶ穂摘み具の機能をもつ石器が現れる。しかし、荒海貝塚の縄文晩期にそのような変化は認められず、また石器の組成に変化が生じていることを指摘することもできない。荒海貝塚は、時期的には西日本の弥生時代前期と併行する。この時期の稲作の問題は、今後とも実証的な研究が必要である。

4 埋葬と抜歯の問題

私たちの荒海貝塚の調査時にはあたらなかったけれども、西村正衛らの第3次調査時には荒海貝塚からは埋葬人骨が発掘されている。正報告はないが、A地点L・M・Nトレンチから5体（1~5号）とC地点Aトレンチから1体（6号）の人骨がみつまっている（図247）〔西村ほか 1965：37-39, 西村 1965：339〕。以下の抜歯状態と1号、4号人骨の性の判断は筆者による〔春成⁽¹⁾ 2004：491・495・505〕。

1号 耕作時の攪乱により遺存状態不良
男性 壮年 上顎の左右犬歯を抜去，下顎の抜歯なし（0型）後期（図248）

2号 耕作時の攪乱により遺存状態不良

3号 側臥屈葬 女性 熟年 上顎右側切歯と左右の犬歯，下顎左右の犬歯を抜去（2C型）安行Ⅰ・Ⅱ式以降

4号 側臥屈葬 男性 熟年 上顎左の犬歯を抜去，右は不明，下顎左右の抜歯なし（0型）下顎骨の下から胸にかけて滑石製白玉53個を発見 荒海第Ⅴ期（大洞A式併行）

5号 屈葬 男性老年 荒海第Ⅴ期（前浦式）

6号 遺存状態不良 女性？ 少年 荒海第Ⅳ期（大洞C2式~前浦式）

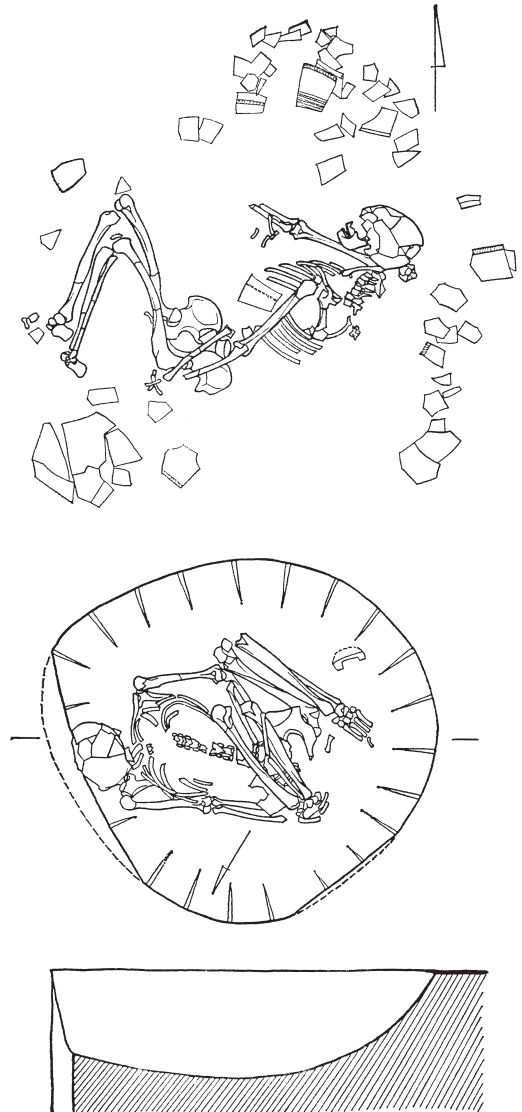


図247 荒海貝塚の埋葬〔西村 1965〕



図248 荒海貝塚1号人骨の上顎
左右犬歯の抜歯状態 (春成写真)

これまで荒海貝塚から見つかった埋葬人骨は、前浦式一大洞A式の時期を下限としており、千網2式～荒海Ⅱ式の間の埋葬様式については明らかでない。そこで、関東地方の他遺跡の状況を見ると、千網2式の時期の埋葬はよくわかっていないが、荒海Ⅰ式と併行する時期に北関東の群馬県安中市しめびきはら注連引原遺跡、東関東の茨城県筑西市（旧、下館市）おぎかた女方遺跡にすでに壺棺再葬墓が現れ、ひきつづいて荒海Ⅱ式と併行する時期には群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡、茨城県桜川村殿内遺跡に壺棺再葬墓が知られている〔設楽2008：340-342, 347-348〕。これまで千葉県で報告された壺棺再葬墓の最古例は、多古町志摩城跡（塙台）遺跡の弥生中期初めの例である〔荒井2006, 荒井編2006〕。

再葬は、遺体を土葬したあと一定の時期がすぎると掘り出して骨の一部を壺に納めて土中に埋める葬法である〔春成1993：48-71, 設楽2008：66-68〕。

こうしてみると、問題の千網2式～荒海2式の時期は、まだ屈葬のような従来の埋葬様式であった可能性が大きい。荒海貝塚の縄文後・晩期に属する3体の人骨には抜歯の風習がみられる。上・下顎の左右犬歯を抜く2C型式と、上顎左右の犬歯だけを抜く0型式であって、関東地方の縄文後・晩期に一般的な型式である。

その一方、東日本では弥生時代にいると、上顎左右の犬歯・側切歯と下顎の中・側切歯を抜く4I型式が多くなる。福島県霊山町根古屋遺跡や群馬県安中市やつはぎ八東脛岩陰から出土した例は、その典型である。春成が弥生中期初めまでさかのぼらせた千葉県館山市安房神社遺跡の4I系抜歯を、出土土器片から設楽博己はさらに縄文晩期水Ⅰ式の時期までさかのぼらせた〔設楽2020〕。弥生後期とされ、春成が疑問を呈していた長野県生仁なまに遺跡例も、この時期だという〔設楽ほか2020〕。これを、東日本で独自に成立したとみるのは困難とすれば、東海地方からの影響とみるのが妥当であろう。しかし、東海地方西部では4I系は2C系を伴うのが常態であるのに、関東・東北地方南部の縄文晩期末～弥生前期の発見例は4I系だけで2C系が欠落している。同様のあり方を示すのが、長野県木曾郡大桑村大明神遺跡〔樋口1976〕や小諸市しめかけ七五三掛遺跡〔田中2003〕の縄文晩期例である。

設楽は土器型式の分布と動向をみて、東海地方から信濃地方を経て駿河付近から関東地方への4I系抜歯の習俗をもつ人の移動を想定している。抜歯の型式からすると、そのように考えるのが自然であろう。そうであれば、縄文晩期の中部・関東地方の一部に、なぜ4I系抜歯だけが存在し、2C系を伴っていないのが問題になる。東海地方西部から少なくとも吉備地方までの範囲では、4I系と2C系はそれぞれ半族の表徴であったと理解するならば、4I系半族に属する人だけが移動したとみるべきであろうか。しかし、半族の制度が生きるとすれば、婚姻の相手は2C系に半族に求めなければならないが、2C系半族の集団は近くに見当たらない。この考えに無理があるとす

れば、4I系と2C系は信濃に伝わったあとで、その区別は形骸化し、それが関東・東北地方に伝わったあとで、その区別は形骸化し、それが関東・東北地方に伝わった可能性である。

いずれにせよ、南関東地方には荒海貝塚例のように、2C系抜歯だけの集団が存在していた。荒海貝塚の抜歯は、旧来の社会が継続していることを示す証拠の一つといえるだろう。

5 荒海貝塚の人びとの生活

本報告書では、荒海貝塚18I区の千網5式は東北地方の大洞A1式、中部高地地方の水I式古段階、東海地方の馬見塚D式そして西日本の弥生I期古段階とほぼ併行し、荒海1式は大洞A'式古段階、水I式中段階、樫王式そして弥生I期中段階と併行し、荒海2式は大洞A'式新段階、水I式新段階、樫王式と同時期で、弥生I期中段階と併行する。荒海3・4式は青木畑式・砂沢式、水II式、水神平式、弥生I期新段階と併行する、と設楽は考察している(表80)。そのうえで荒海3式、水II式から弥生時代と理解した。荒海貝塚の縄文晩期は西日本の弥生前期であった。

荒海貝塚の蛤刃磨製石斧の存在は、荒海貝塚の人たちが弥生文化と接触をもっていたことを示唆する。棒状短剣は、東日本の縄文文化と西日本の弥生文化とをつなぐシンボリックな遺物であるだけでなく、荒海付近から西への文化の流れがあったことを明示する。それだけでなく、荒海貝塚でのみたどることができる棒状短剣の漸移的な変遷は、棒状短剣の発祥地が荒海付近であり、荒海集団が特別な性格をもっていた可能性を示唆している。宮城県椿貝塚・愛知県西志賀貝塚・富山県大境洞窟の棒状短剣は、それだけが移動したのではなく、そのものを身につけた人物が長距離を旅し落ち着いた先にのこした可能性まで想像させる。愛知県朝日遺跡の中段階2のb例や富山県大境洞窟の最新段階のb例などが、古～中段階1の荒海d～e例と比較すると明らかに変容しているのは、地元産の証拠とみてよければ、モノと人の移動先に棒状短剣がレガリアとして一定の定着をみたことの証しとなるだろう。

その一方、荒海貝塚の人びとは、入れ墨を施した顔の土偶をもち、土製耳飾りをつけ、浮線網状文を施した土器を製作し、縄文伝統を守っていた。彼らは、弥生文化の存在をよく知っていたながら、弥生文化に容易に転換しなかったのである。

そうした荒海貝塚に変化が現れるのは、土器のうえでは、荒海2式と同3式との間である。すなわち、荒海3式になると大型壺が出現する一方、荒海2式に出現した変形工字文が定着し、ここに1つの画期を見いだすことができる。

新旧の棒状短剣の多出は、荒海貝塚の人たちが近隣の集団のなかでは中心的な位置を占め、たとえば部族の長を代々だすような特別な集落であったことをうかがわせる。縄文後期の土層に横たわった状態で大型石棒が埋まっていたのも、荒海貝塚C地点から有鉤短剣が出土したのも、荒海集団が一貫して枢要な位置を占めていたことを示唆しているのであろう。荒海貝塚周辺では、同時期の遺跡は大原野貝塚、豊住貝塚、下福田ユウガイ貝塚、宝田鳥羽貝塚、宝田八反目貝塚、荒海川表遺跡が標高4m前後の微高地上に立地し〔石橋編2001:3-6〕、いずれも小規模の遺跡であるのにたいして、荒海貝塚だけは広く平坦な台地上に立地し、この地域では縄文早期末以来くり返し利用してきた継続的な拠点集落である。荒海貝塚が、利根川から長沼の低地にはいって最初の小高い台地の上、水田面からの比高28m付近に立地しランドマーク的な位置に所在していることも、この

こととかかわりがあるのだろう。荒海貝塚の住人たちは、西日本だけでなく関東地方の西部が弥生文化になっていることを知りつつ、東日本の縄文文化の伝統をこの地域で最後まで守ろうとしていた人びとであった。

(春成)

註

- (1)——〔西村ほか1965〕では、抜歯の状態について以下のように記している。
- | | |
|---------------------|--|
| 1号 記述なし(性不明 抜歯不明) | 4号 女性 熟年 下顎左の犬歯を抜去(右は不明) |
| 3号 女性 熟年 下顎左右の犬歯を抜去 | 筆者は1981年7月に新潟大学医学部で調査し、上記の認定が誤っていることを確かめた。 |

参考文献

- 青木幸一 2000「宝田鳥羽貝塚」『千葉県の歴史』資料編、考古1(旧石器・縄文時代)、964-965頁、千葉県。
荒井世志紀 2006『志摩城跡—多古町遺跡群発掘調査報告書—』多古町教育委員会。
荒井世志紀編 2006『志摩城跡・二ノ台遺跡1』千葉県香取農林振興センター・多古町・香取郡市文化財センター。
石橋宏克編 2001『成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』第1分冊・第2分冊、千葉県。
伊藤伸久・笹生 衛・甲斐博幸・矢野淳一 1996『常代遺跡群』君津郡市文化財センター。
小久貫隆史・加納 実・高梨友子 1999『市原市市原条里制遺跡』千葉県文化財センター調査報告書第354集、日本道路公団・市原市・千葉県文化財センター。
小高幸男 1998『常代遺跡Ⅱ』君津郡市文化財センター。
小林謙一 2009「近畿地方以東の地域への拡散」『弥生農耕のはじまりとその年代』新弥生時代のはじまり、第4巻、55-82頁、雄山閣。
小林博昭 1999「明らかになった幻の貝塚」『岡山発 縄文のナゾ最前線—6000年前、岡山人は何を食べたか—』第1回『岡山学』シンポジウム。
佐藤敏也 1971『日本の古代米』雄山閣。
設楽博己 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房。
設楽博己 2020「千葉県安房神社洞窟遺跡の土器と抜歯の年代と系譜」『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地』常木晃先生退職記念論文集、303-315頁、六一書房。
設楽博己・春成秀爾 2000「荒海貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』950-959頁、千葉県。
設楽博己・守屋 亮・佐々木由香 2019「縄文時代後期～弥生時代の植物利用と土器組成」(設楽博己編)『農耕文化複合形成の考古学』下、245-258頁、雄山閣。
設楽博己・近藤 修・米田 穰・平林大樹 2020「長野県生仁遺跡出土抜歯人骨の年代をめぐって」『物質文化』100、95-104頁、物質文化研究会。
昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科中屋敷遺跡発掘調査団編 2008『神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡発掘調査報告書』六一書房。
大工原 豊 2004「生活用の石器」『千葉県の歴史』資料編、考古4(遺跡・遺構・遺物)、398-411頁、千葉県。
高瀬克範 2004「中野谷原遺跡における弥生時代の石製収穫・除草具」『中野谷地区遺跡群2—県営畑地帯総合整備事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』163-166頁、安中市教育委員会。
高橋 護 1992「縄文時代の初痕土器」『考古学ジャーナル』No.335、15-17頁。
高橋 護 1994「縄文農耕と稲作」『考古学と自然科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集。
高橋 護 1997「縄文中期の稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』1-21頁、真陽社。
高橋 護 2001「縄文を映す鏡 プラントオパール」『日本人はるかな旅』4、知られざる1万年の旅、136-151頁、日本放送出版協会。
高柳圭一 1996「第2集中地点」『市原市武士遺跡1 福増浄水場埋蔵文化財調査報告書第2分冊』(『千葉県文化財センター調査報告』第289集)106-111頁、千葉県水道局・財団法人千葉県文化財センター。
田中和彦 2003「長野県七五三掛遺跡出土の縄文時代人骨」*Anthropological Science (Japanese Series)*, Vol.111,

No.1, pp.69-85

戸田哲也編 2015『神奈川県小田原市中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所。

中沢道彦・丑野 毅 1998「レプリカ法による縄文時代晩期土器の糊状圧痕の観察」『縄文時代』第9号, 1-28頁, 縄文時代文化研究会。

西村正衛 1965「埋葬」『日本の考古学』Ⅱ, 縄文時代, 335-352頁, 河出書房新社。

西村正衛 1984『石器時代における利根川下流の研究—貝塚を中心として—』早稲田大学出版部。

西村正衛・江崎 武・馬目順一・平野吾郎・原 信之・大久保 進・戸田 健 1965「関東地方における縄文式最後の貝塚—千葉県成田市荒海貝塚—」『科学読売』第17巻第10号, 27-39頁, グラビア写真。

濱田竜彦 2019「中国地方におけるイネ科穀物栽培の受容・試行・定着」(設楽博己編)『農耕文化複合形成の考古学』上, 141-160頁, 雄山閣。

春成秀爾 1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集, 47-91頁。

春成秀爾 2004「抜歯」『千葉県の歴史』資料編, 考古4(遺跡・遺構・遺物), 488-505頁, 千葉県。

樋口昇一 1967「長野県西筑摩郡大明神遺跡」『日本考古学年報』15, 昭和37年度, 日本考古学協会。

平野 修・榊原功一編 1992『宮ノ前遺跡』葦崎市教育委員会。

町田勝則 2008「石器の使用痕分析—大形刃器に観る使用痕について—」『清水天王山遺跡 第4次—第5次発掘報告』本文編第二分冊, 394-401頁, 静岡市教育委員会。

森岡秀人・中園 聡・設楽博己 2005『稲作伝来』先史日本を復元する4, 岩波書店。